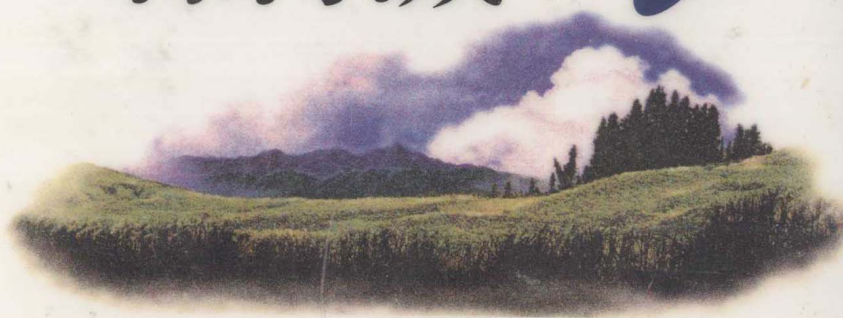


エンドレス ピーク

はるかな嶺
ENDLESS PEAK

森村誠一 上



エンドレス
ピーク
森村誠一

はるかな嶺
ENDLESS PEAK

角川春樹
事務所

©1996 Seiichi Morimura
Printed in Japan



Kadokawa Haruki Corporation

森村誠一

エンドレス ピーク 〈上〉

・

1996年11月18日第一刷発行

発行者 角川春樹

発行所 株式会社 角川春樹事務所

〒101 東京都千代田区神田神保町3-27 二葉第1ビル

電話03-3263-5881(営業) 03-3263-5247(編集)

印刷・製本 中央精版印刷株式会社

定価はカバーおよび帯に表示してあります

落丁・乱丁はお取り替えいたします

ISBN4-89456-067-4 C0093

エ
ン
ド
レ
ス
ピ
ー
ク
へ
上
巻
▽

訣別の山	7
青春の天敵	15
一詩奉公	24
軍の洗礼	35
敵性の悲色	40
戦争の触手	50
狼の皮を着た羊	57
異常の街角	69
悪魔の部隊	76
逸脱した戦争	89
地獄の護符	108

鼠を捕らない猫

119

悲しい再会

128

ペーストーン〔二つの石〕

145

絶望からの救出

157

奴隸の鑄型

168

死への路線

177

皮肉な訣別

193

交換した誓い

207

人間としての死

224

異教徒の勇者

248

死刑確認機

255

死体の豊漁

263

海兵の楯

282

沈んだ象徴

293

裏切られた島

315

最後の校歌

339

装幀
渋谷
育由

訣別の山

一

山は連日、美しく晴れ上がった。

安定した天候の下、北アルプスの名だたる山々が名優の揃い踏みのように雲表に妍を競っている。

夏の山には光が氾濫し、飽和し、そそり立つ鋭い山々に弾んで、自らのエネルギーをもてあましているようである。

光に対しては寛容に、溢れるほどに侵入を許している山を取り巻く高燥な大気は、どんな微細な塵の浮遊も認めず、透明で純粹である。

昭和十六年（一九四一年）八月下旬のある日、北アルプス槍ヶ岳の山頂に五人の若者が立った。

彼らは昨夜上高地に泊まり、今朝未明に上高地を発って槍沢をさかのぼり、梓の谷を登りつめて、いま槍の穂の絶巔に立った。

槍の穂先を構成する荒々しい岩肌を登りつめて、もはやこれ以上は登るところのない三千百八十メートルの頂に立ったとき、彼らは上高地溪谷から、いや、東京から長途の列車に揺られ、島々谷を伝い、梓川を溯行し、勾配を増した槍沢を一気に突き上げて、巨大な終止符を打つ槍の穂先に立つたことが信じられないように、まだ足踏みをしていた。

彼らは槍ヶ岳の山頂からさらに天の真芯に向かつて見えない登路がつづいているかのように、長い登山路がここに終わつた事実が認められない様子であつた。

ようやく遮るもののない大展望の中に、彼らの山旅の目的が達せられたのを悟つた五人は、快い緊張の弛緩と共に全身に蓄えられた疲労が発するのをおぼえた。

五人の若者はいずれも同じ年ごろで三人が日本人、一人が中国人、一人が金髪のアメリカ人であつた。五人のうちの紅一点は日本人である。

「たつた五人の山だな」

一行のリーダー格の日本人の若者が言つた。

筋肉質のがっしりした体格で、精悍な風貌をしているが、目の表情が穏やかである。彼の名は窪田潔。

「おれたち五人ではもつたないな。山仲間に分けてやりたいよ」

つづいて口を開いたのは、ノーブルな細面にスリムな身体 of 若者である。山の陽に焼けているが、本来は色白であろう。育ちのよさそうな若者である。彼の名は野本晴夫である。

「我々にとって最後の山になるかもしれない。だから、山の神様がおれたち五人だけにしてくれただよ」

金髪の若者が流暢な日本語で言つた。遠方に泳がせた青い目に悲しみの色が塗られているよ

うである。

広い額、尖った鼻梁^{びりよう}、意志的に結ばれた口許など、知的な雰囲気^{きせき}が漂っている。彼はヘンリー・バートンである。

「最後にしてはならないよ。おれたちはこの山を最後に別れても、山は永遠だ。山がある限り、おれたちもまたきつと会えるさ」

丸顔の小柄な若者が言った。

一行の中で最も寡黙^{こもく}で控え目であるが、存在感のある若者であった。彼の名は林紹綱^{リンシャウカン}。

「そうよ。私たち、また必ず会えるわ。ねえ、みんなでここで約束しない。また世界が平和になったら一緒に槍ヶ岳に登ることを」

提案したのは一行の紅一点、鮎沢すみ絵^{あゆさわ}である。素直な長い髪が山頂の風に吹かれて顔の輪郭を煙^{けむり}らせているが、切れ長の目の涼しい彫りの深い面立ちの女性である。

五人の若者はいずれも東京青楓学院^{せいふうがくいん}大学高等学部のハイキングクラブの部員であった。クラブの中でも特に仲良しで、入学以来よく一緒に山に登っていた。

講義が終わるとキャンパスの校庭で、将来の虹のようなビジョンを語り合い、渋谷の喫茶店で閉店時間まで青春や人生を論じ、学期末の休暇には一緒に旅行をしたり山へ登ったりしていた。

彼らにとって青楓学院は青春の学院であり、まさにアルト・ハイデルベルク（青春の学園生活）であった。

だが、時代は彼らに青春のキャンパスライフの謳歌^{おうか}をいつまでも許してくれなかった。

日中戦争の泥沼化と共に世界の戦雲は慌しく、日本はドイツ、イタリアのファシズム国家と

足並みを揃えて、軍国主義体制を確立し、米英仏蘭等の民主主義国家群との対立を深めていた。

日本全国軍事色一色に塗りつぶされ、軍靴の響きは列島を圧して、対米英開戦必至の潮流が国民のすべてを巻き込んで滔々と流れていた。

潮流の行方に暗い予感をおぼえる者はあっても、それに逆らう者は非国民とレッテルを貼られる。

軍国主義体制の確立した下では、反戦平和を訴えることは国に対する謀叛であり、日本人の風上にもおけない不忠不義の非国民とされた。

戦争に向かつて挙国一致して戦力を蓄えるために、国民生活はあらゆる分野にわたって締めつけられていった。

経済は統制され、食糧をはじめすべての物資が欠乏して、国民は耐乏と節約を強制された。

国民は政治的自由、思想的自由を奪われただけではなく、国家の目的として掲げた戦争体制に組み込まれて、人間としてのすべての自由と生きる楽しみを失っていったのである。

昭和十六年に入り、ルーズベルト米大統領は民主主義国家援助を發表し、東条陸相は「生きずきの辱を受けず、死して罪禍の汚名を残すこと勿れ」の戦陣訓を全軍に示達した。

二

青楓学院はミッシェンスクール（キリスト教系学校）で、アメリカ・メソジスト教会本部から物心両面にわたって援助を受けていた。

だが、昭和十五年、文部省の指令によってミッシェンスクールは諸外国の教会本部との関係

を断ち、独立するように強制された。

昭和十六年に入り、日米関係の險悪化に伴い、アメリカから学院に派遣されていた宣教師に本国から帰還命令が出された。これにつづいてアメリカ人教師も相次いで帰国していった。

米英語は敵性語として弾圧された。ジャズや軽音楽は敵性音楽、野球も敵性スポーツとして排除、弾圧され、チーム名やルール、審判用語など珍妙な日本語に変えられた。

この時代、觀念右翼の哲学者、元九州帝大教授の鹿子木員信は、

「現存する敵性文化の最大記念碑は中等学校に於ける英語教育の強制にあると思うのです。と申しますのは、敵米英の思想感情その他一般文化の媒介者は、なんと申しても英語が主たるものである。この英語を日本の少年少女に向かって強制的にやらしめる。ここに日本の思想的、精神的、文化的、対米英依存の根源があると思う。（中略）抹殺さるべき米英の言葉を、この撃ちてしまふの曠古（前例のない）の戦ひを戦ひつつ、尚且つ将来の日本を背負ふべき少年少女に向かって強制的に教へるとは何事であるか」

と主張し、当時の言論界を主導した時相下にあつて、「英語の青楓学院」として名声を馳せた青楓学院は創立以来未曾有の受難期に遭遇していた。

このような非常時における登山やハイキングやピクニックはすべて輕佻浮薄な、非常時的遊山として圧迫された。

登山も軍部によつて皇国民鍊成のための行軍とされた。

山に憧れ、自然を愛し、自然の恵みに浸るのではなく、味も素気もない軍事教練の一環として記録を争い、足腰の鍛練を目的とした行軍に、山を愛するアルピニストやハイカーは反発した。

五人グループにも暗い時相は容赦なくのしかかってきた。

ヘンリー・バートンの父親は貿易商として日本に長く住んでいたが、近い便船で一家を挙げて本国へ帰国することになっている。

林紹綱の父親は親日派の作家であるが、日中戦争勃発以来、特別高等警察（思想警察）の厳しい監視下にあつて、おもうような作品が書けなくなつたために日本での文筆活動に嫌気がさして、中国への引き揚げを決意した。

窪田潔と野本晴夫も卒業すれば徴兵検査が待っている。

満二十歳に達した者はすべて徴兵検査を受けて、本人の意志に関わりなく戦場へ引っぱり出される。

青春の学園も戦場と隣り合わせになっていた。

彼らの在籍する青楓学院高等学部は二年制と三年制があり、彼らは三年制に在籍していた。三年制を選んだのは、大学と高等専門学校の学生は卒業まで兵役を延期されることになっていたからである。

だが、時相は彼らにのんびりした勉学を許さず、繰り上げ卒業が決定されていた。

五人は学生時代、最後の登山として槍ヶ岳に登った。北アルプスの盟主として雲表に鋭く聳え立つ槍ヶ岳を、彼らの青春の象徴として、また友情の記念碑として心に刻みつけておくためである。

国家から戦争を強制されず、自分の自由意志で生きられる時代がきたら、またこの槍ヶ岳に集い合おう。

五人は青春の約束を交わし合いながら、それを果たせる日がもはやこないような不吉な予感

に怯^{おそ}えていた。

「私、どんなことがあっても必ず戻って来るわ。ここで誓い合いましうよ。槍ヶ岳に、穂高に、視野の限り見えるすべての山々に、もう一度みんな揃って戻って来ると」

鮎沢すみ絵が言った。

「そうだね、おれたち、ここで別れても、今日のこの日を忘れない。またこの同じ場所でふたたび会う日のために別れるんだ」

窪田が言った。

「アメリカへ帰っても」

「中国へ帰っても」

「今日の誓いは忘れないよ」

ヘンリー・バートンと林紹綱が異口同音^{いくどうおん}に言った。

「記念に山頂の石を一つずつ持ち帰ろう」

窪田が提案した。

「ここで再会したときまた五つの石を持ち寄りましたようよ」

すみ絵が拾い集めた五個の小さな石を一つずつ配った。

「写真を撮ろう」

野本晴夫が三脚を立てた。

穂高岳を背景にして五人はカメラの前にポーズした。

長い夏の日がようやく傾きかけている。山脈の上に幾層にも積み重なった積乱雲の頭が赤く染色されている。切り立った深い谷底から霧が這^はい上って来ている。山は赤みを帯びた斜光の

中に陰影を濃くしつつ、遠く黄昏^{たそがれ}を呼び寄せていた。